

【今週の注目疾患】

《水痘（みずぼうそう）》

2025 年第 15 週に県内の小児科定点医療機関から報告された定点当たり報告数は、0.31（人）となった。

2024 年は 2023 年と比較して増加傾向にあった。また、2025 年は昨年同時期の累計報告数を上回っており、今後の発生動向に注意が必要である。

なお、水痘に関しては、小児科定点医療機関からの報告のほか、入院例を対象に全数把握によるサーベイランスが行われている。概要は以下のとおり。

【小児科定点】

2014 年 10 月 1 日から水痘の予防接種は定期接種となり¹⁾、以降、定点当たり報告数は減少傾向にあった。2020 年以降は更に減少し、2021 年から 2023 年は年間を通じて低値で推移した。2024 年は 2023 年と比較して高値で推移し（図 1）、年間累計報告数も 2 倍となった。2025 年第 15 週までの年間累計報告数は 415 例であり、2024 年の同週時点を上回っていた（図 2）。

図 1：2014 年から 2025 年第 15 週までに県内小児科定点医療機関から報告された水痘の定点当たり報告数

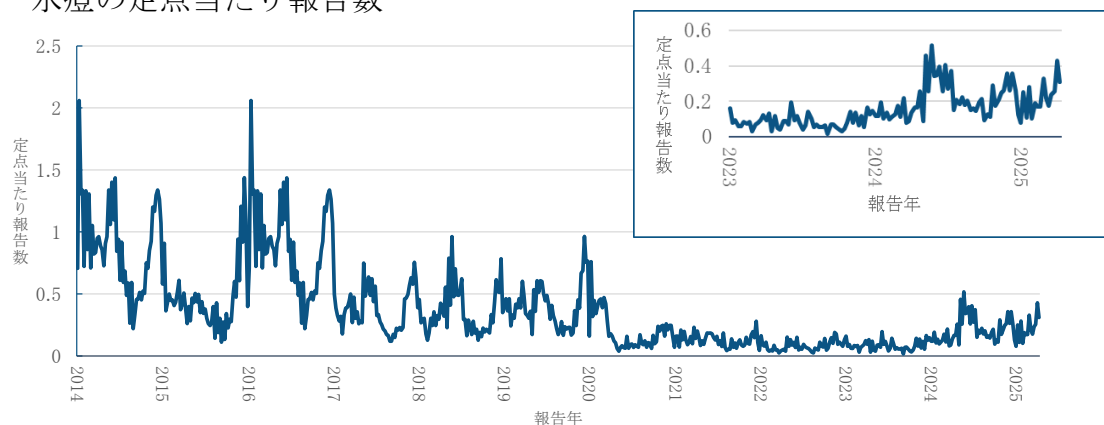
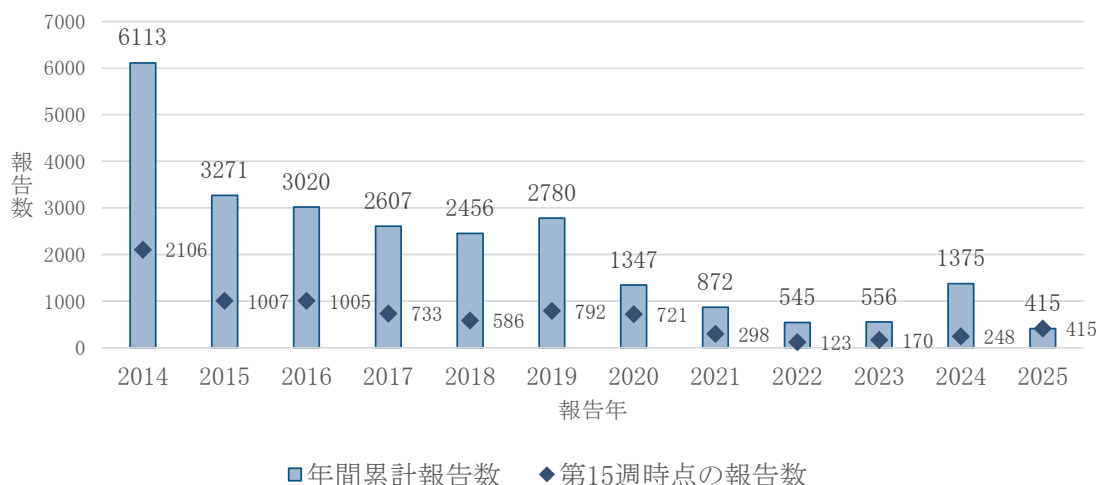


図 2：2014 年から 2025 年第 15 週までに県内小児科定点医療機関から報告された水痘の年間累計報告数及び第 15 週時点の報告数



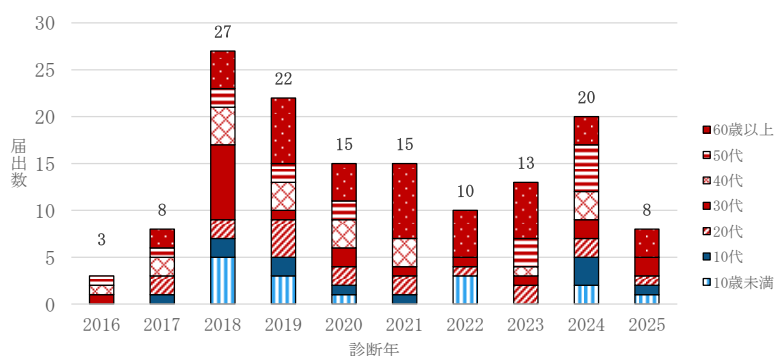
【全数報告（水痘（入院例））】

報告対象は、年齢に関わらず、24 時間以上入院した症例（他疾患で入院中に水痘を発症し、発症後 24 時間以上経過した例を含む）である²⁾。

2025 年の累計届出数は 8 例であり、2024 年同週時点の累計届出数 5 例を上回った。性別では女性が 5 例（63%）、男性が 3 例（38%）であった。年齢群別では 30 代及び 60 代がそれぞれ 2 例（25%）で最も多かった。

2016 年から 2025 年第 15 週までに届出は 141 例あり、性別では男性が 90 例（64%）、女性が 51 例（36%）であった。20 歳以上の者が 115 例で、8 割以上を占めた（図 3）。

図 3:2016 年から 2025 年第 15 週までに県内医療機関から届出された水痘（入院例）の診断年別・年齢群別届出数（n=141）



水痘とは、いわゆる「みずぼうそう」のことで、水痘帯状疱疹ウイルスによって引き起こされる発疹性の病気である。空気感染、飛沫感染、接触感染により広がり、潜伏期間は感染から 2 週間程度と言われている。発疹出現前から発熱が認められ、典型的な症例では、発疹は皮膚の表面が赤くなることから始まり、水疱、膿疱（粘度のある液体が含まれる水疱）を経て痂皮化して治癒するとされる³⁾。

水痘は主に小児の病気で、9 歳以下での発症が 90%以上を占めると言われる。成人の水痘も稀にみられるが、成人が水痘を発症した場合、重症化するリスクが高いと言われている³⁾。また、出産 5 日前から出産 2 日後に母体が水痘を発症すると、妊婦自身が重症化する可能性に加え、児が重症の新生児水痘を発症する可能性がある²⁾。

水痘の予防接種は 1 回の接種により重症の水痘をほぼ 100%予防でき、2 回の接種により軽症の水痘も含めてその発症を予防できると考えられている。水痘ワクチンの定期接種は、生後 12 月から生後 36 月（1 歳の誕生日の前日から 3 歳の誕生日の前日まで）の間に 2 回の接種を行うこととなっている³⁾。

■引用・参考

1) 国立健康危機管理研究機構：水痘ワクチン定期接種化後の水痘発生動向の変化

<https://id-info.jihs.go.jp/niid/ja/varicella-m/varicella-idwrs/10892-varicella-20220113.html>

2) 厚生労働省：水痘（入院例に限る。）

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou11/01-05-140912-2.html>

3) 厚生労働省：水痘ワクチン

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/yobou-sesshu/vaccine/chickenpox/index.html